

2. 未開の札滑地域

長岡 喜代太

明治29年3月1日生。山形県出身。
父喜三郎。



初期の入殖者

私の郷里山形県は、開発も進んでいて、水田なども小高い山の上まで、石垣を段々に積んで、「田毎の月を眺める」と言われる状況で、土地も狭く、農業として伸びる余地はなかった。

父はこれではどうにもならん、北海道で土地をもらって一旗上げようと、土地や家屋を処分し、当時の金で、千円を内地に残し、300円を持って北海道に渡った。

青森から室蘭に船で渡り、名寄までは汽車で、名寄から徒歩だった。札滑に着いたのは、あと一週間で、明治41年になるときだったので、40年の12月25日頃だったろう。

翌年(41年)4月ころ、長岡長七や、福島のア積団(団長古川太郎治)が入り、42年春には、福島田村団(団長佐久間今朝次)が入って、札滑の入殖者は、40戸位になったであろうか。

札滑には払い下げを受ける土地がなくて、最初は、田所新蔵の小作だったが、すぐ一箇分を250円で買い取り、あと一箇分は、川村留吉(米田駅逋管理人)の奥さん名儀の土地を100円で買い取った。金の不足分は内地から取り寄せたのである。

そのころ、上興部地域には、小林四郎左衛門、館岡与三松、吉野甚六、畠野乙蔵、テッペ齊藤、小林柁屋(カ蔵)等が居たが、その他にも人が住んでいたのだろうが、密林で余程開墾されないと、人家のあるのが分らなかった。本間周吉が店を始めたのは、私たちが入殖した直後だったと思う。

札滑では大下さんが古く、私に次いで古い人は、団体のほかに、宮本章作、千葉安次郎、角田豊治、菅原虎力、千田専蔵、山本、熊谷等であった。

荒地開き

開墾は、初めて手にする鋸や斧で、大木を伐り倒し、何か所かにこれを積んで焼き捨てた。今考えると勿体ないことをしたものだ。伐り倒せない大木は、枝を下し、幹に鋸目を入れて斧で皮をむき、立ち枯らしにして、何年か後に伐り倒した。

焼き払ったあとに、菜種やソバをバラ蒔にし、麦はすじだけ切って蒔いた。菜種は三町歩で40俵ほど、馬鈴薯は大きな薯が30俵(一反歩)くらいも穫れたが、澱粉質の少ないものだった。

耕さない荒地に、秋大根を早く蒔くと、大きくなり過ぎて、トビロで大根の周りをつついてからでないと抜けなかった。

開墾は、手耕しのほかに、バラ蒔、すじ蒔などをして、笹や木の根が少し腐り初めたとき、大きな木株と木株の間を、名寄から買ってきた小さなプラウ(一頭七分)で耕したが、木株が邪魔で、余り能率が上らなかった。

食糧買出し

私たちの家族は、両親、祖母、兄弟8人に、甥、姪、2人の計13人の大家族で、食

糧を確保するのに大変だった。米は、小林四郎左衛門に手配してもらったが、そんなに米を常食にできず、麦がなかったので、興部の多田三次郎から購入した。

しかし、運搬に大変だったので、土産子馬一頭を買った。たしか20円くらいだったろう。この馬は、駅通馬を除いては、この村（西興部地域）では一番早かったのではなかろうか。

※本村初の農耕馬としては、明治40年に東興の吉野甚六が、土産子馬を購入しているという。

背丈け四尺位の土産子だったが、力が強くて、興部から麦6俵（そのころは、1俵は2斗でなかったか）を駄ぐらに積んで来たものだ。翌年（42年）青毛馬を一頭35円で買った。このほか食糧買出しに、東興の吉野さんまで行ったことが度々ある。

吉野さんは、私たちより早く入地していたので、馬鈴薯馬を二作位したのを貯蔵してあったので、これを分けてもらったもので、妹のふじ（佐久間好一の母）と二人で、背負って帰った思い出は、忘れることができない。

峠茶屋のおやき

私は兄と二人で朝早く、馬の駄ぐらに雑穀を積んで、名寄へ向けて出発すると、天北峠の頂上で朝日が昇って来て、ここで必ず一休みしたものだ。

勿論道は、道路なんて言えない程の悪いものだった。峠には茶店があって、小林茂吉さんがやっていた。小林さんは、米田駅通の配達夫をしていて、此所から通って居り、息子の吉次さんは、上興部教育所の先生だった。

この茶店では「おやき」を焼いて売っていたが、「おやき」と言っても、団子を平らにしたものに、黒砂糖を入れた豆あんを塗りつけたもので、なんでも1銭に2個位で、2銭あたい食えば、腹一杯になり、私たちもよく買って食べたものだ。

小林さんが茶店をやめた後を、菅野（少次郎）さんがやったはずだし、最後は洞口新兵衛が、うどんや酒をおいて大分儲けたらしい。御料林の山番をしながらやっていたが、鉄道が開通してから、上興部駅前であらま屋という二階建ての大きな旅館を経営したが、これもこの茶店で儲けたのだろう。

※後に、この旅館を解体、農協支所の建物に転用している。

いま汽車から見ても、茶店があった所は分らぬ程変わったし、舗装された峠の道を、車がスイスイ走るのを見ると、悪路の峠に、明治大正の旅人の唯一の休息所だった小林さんの茶店は、本当に懐しく思い出される。

その他の思い出

札滑で、初めて澱粉工場を始めたのは、菅原虎力、阿部鉄治、折笠宝蔵の共同工場です。それから沢山の人が始まり、私も佐久間さんと、共同工場を営んだことがあります。

札滑九線に、磯部佐久馬さんの親類で、名寄の野坂という人が、山木工場を建て、水力で製材して名寄方面に送っていた。初めの動力は、人力の挺で押し回していた。後に澱粉も製造したが、岩間安吉、磯部佐久馬、面作松らが一緒に仕事をしていました。

70年近い年月を経て、人も変わり、淋しい気もするが、変わらない山の姿だけが懐かしい。